

琵琶湖の水中遺跡と災害痕跡

プロローグ 琵琶湖では多くの水中遺跡（琵琶湖とその集水域の湖にある遺跡）が知られています。琵琶湖（大津市南郷地先の瀬田川洗堰より上流）に 77 遺跡と余呉湖に 1 遺跡、琵琶湖の内湖（すでに陸化した内湖を含む）にある 24 遺跡を加えた 102 遺跡です。なぜ琵琶湖の水中に遺跡（人の活動痕跡）があるのか。その成因は様々ですが、最も影響が大きな出来事は、地震による地すべりなどの地盤変化と、琵琶湖の水位の変動（上昇）であると考えられます。

1 なまづ 鯰の大暴れ 令和 8 年（2026 年）の大河ドラマは豊臣兄弟が主人公です。彼らが活躍した 16 世紀末には、大きな地震が何度も起こっています。天正 13 年（1586 年）には近畿から東海、北陸にかけて天正地震が発生し、「長浜之御城殿」（資料 1）が崩れて当時の城主山内一豊の娘や家老らが亡くなっています（『一豊公記』）。

地震は大鯰が暴れて起こるとの話は、今もよく知られています。これは江戸時代末期の安政 2 年（1855 年）に発生した安政江戸大地震の後、その被災状況を伝える瓦版に鯰絵（資料 2）が多用されたことによって広まったようですが、それより 260 年以上も前の文禄元年（1592 年）、秀吉は家臣の前田玄以にあて「ふしミ（伏見）のふしん（普請）、なまつ（鯰）大事にて候」と書いた手紙を送っています。「なまつ」とは地震のことで、秀吉はおそらくはさきの天正地震での経験を念頭に「伏見城の建設にあたっては地震に気を付けろ」との指示を与えたようです。しかしながら天下人の注意喚起もむなしく、文禄 5 年（1596 年）に畿内を中心に大地震が発生し（慶長伏見地震）、完成後まもない伏見城の天守や御殿等は大破・倒壊してしまいました（『義演准后日記』など）。

鯰祭 ところで、高島市の藁園神社の例祭は鯰祭と呼ばれます。同社には正元元年（1259 年）のこととして「地震をともしう大雨が続き洪水となった際、現れた鯰を神主が退治したところ、たちまちに雨がやんで晴れてきた」という伝承があります。また、正保 2 年（1645 年）のこととして、この神社に害虫駆除の祈願をしたところ、「鯰が群れをなして現れ、害虫をことごとく食べつくした」といいます。鯰は地震や洪水といった災害と結びつく一方、害虫駆除や早ばつの際の雨乞いといった福をもたらす存在として、多様なイメージで語られることがうかがわれます。



資料 1 長浜城遺跡の井戸跡「太閤井跡」碑



資料 2 鯰絵（「江戸鯰と信州鯰」）

2 寛文近江若狭大地震

鯨の大暴れはともかく、琵琶湖とその周囲にはいくつもの断層が知られています（資料3）。琵琶湖は断層湖と呼ばれ、琵琶湖北部の湖底では、深い場所が西側に偏っています。それは、琵琶湖西岸断層帯をはじめとする断層運動の影響とされています。

寛文2年（1662年）に発生した寛文近江若狭地震は近江（滋賀県）に甚大な被害をもたらしました。膳所城（大津市）はゆがんで石垣が崩れ、水口城（甲賀市）も櫓・多聞櫓・堀が大破・損壊。彦根城（彦根市）でも石垣が五百～六百間（約910～1,092m）も崩壊し、城下では町屋1,000軒余が破損・倒壊して、死者も30人余を数えました。大溝（高島市）でも家屋敷1,022軒が倒壊し、死者は30人余にのぼりました（『殿中日記』）。

膳所城跡（大津市） 琵琶湖に突き出た膳所崎に位置します。関ヶ原合戦後に徳川家康が湖上・陸上の要衝であったこの場所を掌握するため、慶長6年（1601年）に藤堂高虎に築かせた水城です。当時は石垣上に建つ白壁の天守や櫓等が美しい城だったと伝えられています。

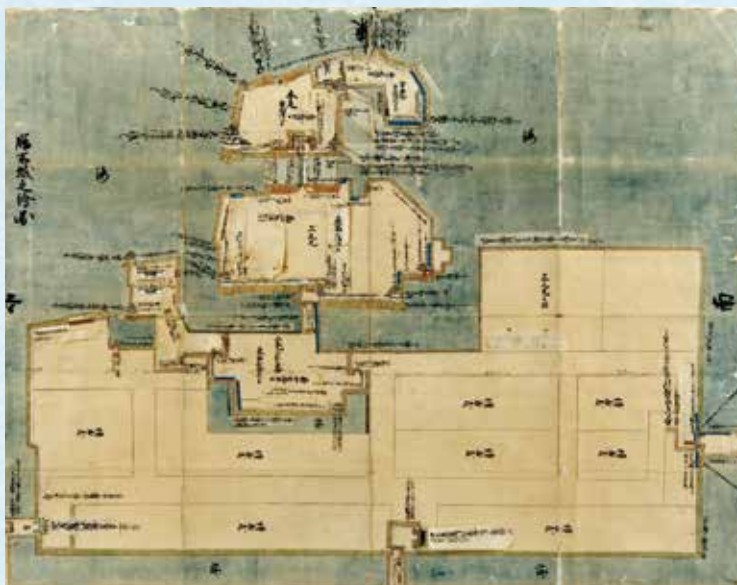
寛文2年、琵琶湖西岸の花折断層の北部と若狭湾沿岸（福井県嶺南地方）の日向断層が連動する大地震が発生しました（寛文近江若狭大地震）。この地震の規模は、マグニチュード7.5前後と推定されており、震源である近江国・若狭国を中心に京都や大阪まで災害が広がりました。地震の規模が大きかったことに加え、膳所城は湖岸の軟弱地盤に立地していたため、天守は傾き多くの石垣が崩壊しました。さらに櫓や門等も破損・崩落し、復興にあたっては本丸と二の丸の間の堀を埋め立てて新たな本丸を再建しています。膳所城はこのように縄張りを変更する程の大きな被害を受けました。資料5は「海へくずれもうしろろう崩申候」などと地震被害の状況を幕府に報告し、修復の許可と援助を求めるために作成されました。近年の潜水調査でも、膳所城跡周辺の湖底に瓦や石材が散らばっている様子が確認されています（資料4）。



資料3 琵琶湖とその周辺の断層



資料4 膳所城跡中の湖底に沈む石垣石材



資料5 膳所城寛文地震修復願ヶ所絵図

3 水没村の伝承

琵琶湖の北湖（琵琶湖の最小幅である琵琶湖大橋がかかる箇所より北側）を中心として、地震等によって集落が湖中に水没したという水没村の伝承が点在します。長浜市の西浜千軒や下坂浜千軒、阿曾津千軒、米原市の尚江千軒や磯千軒、高島市の三ツ矢千軒や藤江千軒、舟木千軒等です（資料6）。

西浜千軒の伝承地（長浜市） 「^{ぎおん}祇園村の西に所在した『西浜村』が、室町時代の^{かんしょう}寛正年間（1460～66年）の大地震により湖底に水没した。難を逃れた人々は祇園町や長浜町へ移り、村名を姓として『西浜^{どうこう}同行』を称した」という伝承があります（『改訂近江国坂田郡志』）。ただし、寛正年間に大地震の記録はなく、地震の時期を寛文2年（1662年）とする口伝もあります。一方で、西浜村の存在は『永^{えいきょう}享七年（1435年）^{かんじんさるがく}勧進猿楽奉加帳』に記載されており、実在が確実であるという点で、後述する尚江千軒とは異なる性格を有すると言えます。

水中調査では、沖合 70m 前後、水深 1.27m 前後の地点で、中世墓と推定される山石を用いた石組区画や石仏（阿弥陀如来坐像）、石製五輪塔^{ごりんとう}などが確認されています（資料7）。墓地の存在はすぐさま集落の水没を裏付けるものではありませんが、かつての生活面が沈降した可能性を強く示唆しています。

このように、古文書の記録から西浜村の存在は確かで、湖底の中世墓遺構の存在等から、かつての生活面が水没したという伝承にも一定の^{しんぴようせい}信憑性があります。一方で、水没年代については、中世墓の遺物は 16



資料6 琵琶湖の水没村の伝承と水中遺跡
(このパンフレットの掲載分、地名等を含む)



資料7 西浜千軒伝承地の中世墓と推定される石組区画

世紀後半を中心としており、さらに当該期の水位や災害記録から、水没原因は天正地震に求めることが^{おんとう}穏当です。つまり、本来「てんしょう」に発生した地震が、「かんしょう」そして「かんぶん」と、まるで言葉遊びのように言い伝えが変質し、伝承として受け継がれたと考えられます。

下坂浜千軒の伝承地（長浜市） 昭和 27 年（1952 年）頃の琵琶湖の大湖水時、長浜市下坂中町・下坂浜町沖の琵琶湖中から井戸跡が姿を現しました（資料 8）。この付近では、湖岸から約 100～130m 沖合いの湖底で多数の杭が見つかるほか、昭和 10 年（1935 年）頃には仏頭が湖岸に打ち上げられています。

中世の下坂庄は下坂鍛冶^{かじ}の居住地として知られていますが、江戸時代の初め頃までに下坂を名乗る刀工^{とうこう}たちが全国各地に移住します。慶長年間（1596 年～1615 年）の初め頃に越前に移り住んだ下坂市左衛門は、北ノ庄城主^{ゆうきひでやす}の結城秀康のお抱え鍛冶となった後、秀康の推挙により徳川家康に仕え、「康」の字を賜って「康継」を名乗り、幕末まで続く江戸幕府の御用鍛冶「越前康継」の祖となりました。下坂鍛冶は、天正地震あるいは慶長伏見地震での被災を契機に、全国各地に移住したと考えられています。



資料 8 長浜市下坂中町・下坂浜町沖の井戸跡
(左手奥は良禰寺の初代大仏)

尚江千軒・磯千軒の伝承地（米原市） 尚江千軒は「古へ筑摩^{いにし ちくま}の西北に当り、尚江と称する大村ありしが、中古大地震の時、その地陥落して湖中に沈めりと伝へ、風浪なき日、湖底を瞰視^{かんし}すれば、井戸の遺趾等を見る事を得べしといへり」と伝えられ、磯千軒は「磯の漁人の談に、磯より三・四十町を隔つる湖中の一帯に浅瀬あり、湖水澄徹^{ちやうてつ}の日に水底を凝視すれば、井戸の土筒等点々存在するを見る」と伝えられます（『近江坂田郡志』）。

尚江千軒の伝承地周辺の潜水調査では、いくつかの遺構が確認されています。代表的もののひとつが、沖合約 250m、水深約 4.0m で確認された石材群です。この石材の一部には江戸時代後期^{やあな}の矢穴痕が伴い、同様の石材は現在の湖岸集落でも多用されていることから、石垣等が水没したと考えられています（資料 9）。



資料 9 尚江千軒伝承地の矢穴痕のある石材

さらに周辺の地質学的な調査によっても、興味深い事実が判明しています。湖岸部の陸上表面波^{ひょうめんは}探査では、浅い地下に 2 列の浜堤^{ひんてい}と、浜堤間に形成された湿地に由来すると推定される堆積物層が確認されています。こうした地質構造下では、湖岸部など一見平坦な場所であっても地下が軟弱な構造となり、液状化現象による地すべりが生じやすいことが指摘されています（資料 10）。こうした湖底の遺構や地質構造から、伝承地周辺ではいずれかの時代、あるいはいくつかの時代に、地盤沈降を伴う災害が生じ、集落の水没が発生した可能性が高いと考えられています。



資料 10 表層地すべりの発生模式図

三ツ矢千軒の伝承地（高島市）

『高島郡誌』には「大三ツ矢は船持問屋もありて、永田村より寅卯にありて、葭島より百間許も沖に在りしなり。其村址は水底に石垣一町斗もあり、石橋もあり、旱水の時は五尺許の水底なり。某年今の地に移りて鯰川と称す。小三ツ矢は青柳村大字小川の三ツ矢なり」とあり、時期不明ながら、集落の位置や移転先の状況を伝えます。

伝承地周辺の湖底には巨大な石塁状遺構の存在が知られています。遺構は大量の石材が折り重なるように積み重なって、湖岸から約50mの地点より沖合いに向かって約80m延びた後、北東方向に直角に24.5mも曲がる長大なものです。これは「水底に石垣一町斗もあり」とする伝承とも符合します（資料11・12）。

同様の構造物は、現在の琵琶湖湖岸各地で確認できます。多くは河口部に位置することから、波の力によってもたらされる土砂の堆積を抑制し、河川の通水機能を維持する役割を担っていたと推定できます。石塁上に立石を配する事例もあることから、これは船の係留施設としても用いられたと考えられます。

この集落の水没は、江戸時代前期に描かれた絵図などから、寛文2年（1662年）の地震による可能性が高いと考えられます。

4 発掘調査で見つかった災害痕跡

水中遺跡の発掘調査においても、文献に記録がない弥生時代以来の災害の痕跡が見つっています。地震による土地の液状化（噴砂等）や津波等による被害の痕跡です。湖底に沈んだ遺跡は水中であればこそ災害後も復旧されず、被災状況をそのまま伝えるといった点で、災害の歴史を知る上で大切な文化財です。

はりえはま

針江浜遺跡（高島市）

湖岸から約100m沖合いにある弥生時代前期～古墳時代前期の集落跡です（資料13）。ここでは、弥生時代中期のマグニチュード7.5クラスの大地震の痕跡が見つっています。資料14は倒れたヤナギの埋没林です。同じ方向に倒れているので、地盤の液状化もしくは琵琶湖の津波による影響と考えられています。資料15は地盤の液状化によって地中の土砂・水分が地上に吹き出た噴砂の痕跡（白色部分）で、資料16はその土層の断面です。



資料11 三ツ矢千軒伝承地の石塁状遺構の位置



資料12 三ツ矢千軒伝承地の石塁状遺構の石材群



資料13 針江浜遺跡の調査地全景



資料14 針江浜遺跡で検出されたヤナギの埋没林



資料15 針江浜遺跡で検出された噴砂の痕跡（平面）



資料16 針江浜遺跡で検出された噴砂の痕跡（断面）

しおつこう 塩津港遺跡（長浜市） 京都と北陸とをつなぐ国家的な港の遺跡において、平安時代後期の神社跡が見つかっています（資料17）。噴砂の痕跡からマグニチュード7.4クラスの大地震が起こったとみられ、同じ方向に傾いた掘立柱建物跡の柱根から、これらの建物は琵琶湖からの津波を被^{こうむ}って倒壊したと考えられています（資料18）。境内地を囲む堀跡から出土した神像5体は、被災して倒壊した本殿とともにそのまま放棄されたと推定されます（資料19）。神仏への誓いを記した起請^{きしょうもん}文木札^{きふだ}の年号から、この被害をもたらした大地震は、文治元年（1185年）の文治地震であったと考えられています。



資料17 塩津港遺跡で検出された神社跡



資料18 塩津港遺跡で検出された掘立柱建物跡の柱根



資料19 塩津港遺跡の神社跡に放棄された神像

だいなか こみなみ 大中の湖南遺跡（近江八幡市） 琵琶湖最大の内湖であった大中の湖（現在は干拓により陸地化）において、陸地から旧内湖に向かって突堤^{とつてい}状に突き出た奈良時代の石敷き遺構2本が見つかっています。これは港湾施設（突堤）と推定され、その構造は2列の板材（側板^{がわいた}）を打ち込んだ間に石材を詰め込んでいます。

資料 20 は、地震による抜け上がりの状況を示しています。抜け上がりとは、地震による地盤沈下・液状化等が原因で発生する現象です。つまり、地面に打ち込まれた側板はそのまま、その間に詰め込まれた石材のみが沈下し、本来は同じ高さであった石列と側板のうち、側板のみが浮上して見える現象です。この遺構は、側板が石敷きより 70~90cm も浮き上がっています。江戸時代に発生したマグニチュード 7.6 クラスの大地震の影響と考えられています。



資料 20 大中の湖南遺跡の突堤状遺構

5 水位上昇による水没遺跡

ここまでは地盤変化による水没事例を紹介してきましたが、琵琶湖の水中遺跡の大きな成因のもうひとつは、琵琶湖の水位の変動（上昇）と考えられています。過去最大の琵琶湖の水位上昇は明治 29 年(1896 年)の大洪水です（資料 21）。集中豪雨により琵琶湖の水位は基準水位（B.S.L）より 3.76m も上昇し、死者・行方不明者の発生、家屋の全壊・半壊、田畑の収穫物の浸水等、多くの水没被害が発生しました。当時の水害の記憶は、各地に建てられた石造物（大津市下阪本所在の酒井神社境内に建つ明治二九年琵琶湖洪水石標等）によって今日に伝えられています。



資料 21 明治 29 年(1896)年の水害時の西川口町の様子(大津市浜大津周辺)

琵琶湖の水位を人為的に調整できるようになるのは、この水害を契機として明治 38 年（1905 年）に瀬田川に南郷洗堰（瀬田川洗堰の前身）が完成してからで、それ以前は短期的にみると、琵琶湖の水位上昇による浸水（水込み）は、ほぼ隔年で発生していました。他方、これを長期的な歴史的視点で眺めると、琵琶湖の水位は縄文時代以来、大きく上昇しています。それは次第に上昇するというわけではなく、大きく上昇する時期が何度かあったことが知られています。その最初は、今から 5,000 年ほど前の縄文時代中期後半頃から始まったと考えられ、栗津湖底遺跡



資料 22 栗津湖底遺跡の発掘調査の状況

（大津市）は今や琵琶湖の基準水位（B.S.L）よりも 3.9m も低い位置に水没しています（資料 22）。

また、天平勝宝 3 年（751 年）の近江国司の上申書に付された『近江国霸流村墾田地図』は、犬上郡・愛知郡にまたがる霸流村 70 町の田の分布を描いた古代荘園図です。霸流村は荒神山と琵琶湖に挟まれた彦根市三津屋町・石寺町付近に比定されますが、琵琶湖の水位上昇の影響を受けて室町時代（15 世紀頃）に水没し、内湖（曾根沼）となりました（資料 23）。

エピソード

このパンフレットでは地震による地すべりなどの地盤変化と、琵琶湖の水位の変動（上昇）によって水没した遺跡や伝承地を紹介しました。琵琶湖の水中遺跡をとおして災害や環境変化の歴史をもう一度真摯に学ぶことで、これからを歩んでいく知恵を授かることができるのではないかと考えています。このパンフレットが、私たちの未来を考える一助となれば幸いです。

資料の出典

資料1・6・13～20・22：滋賀県、資料2：『江戸鯨と信州鯨』 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1302102> (参照 2026-05-18)、資料3：産業技術総合研究所 地質調査総合センターウェブサイト 地質図 Navi 活断層データベース（産業技術総合研究所(2024) 2024 年 8 月 23 日版）(<https://gbank.gsj.jp/activefault/>) より転載（一部加工）、資料4：木村淳氏（東海大学教授）提供、資料5：滋賀県立図書館提供（同館ウェブサイト「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道 『膳所城之図』」より転載）、資料7・11・12：中川永氏（豊橋市美術博物館学芸員）提供、資料8：長浜市長浜城歴史博物館提供、資料9：林博通氏（滋賀県立大学名誉教授）提供、資料10：林博通・釜井俊孝・原口強『地震で沈んだ湖底の村 琵琶湖湖底遺跡を科学する』サンライズ出版、2012 年よりトレースして引用（中川永氏作成）、資料21：滋賀県立図書館提供（同館ウェブサイト「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道 明治 29 年大津市内水害絵はがき（複製）／西川口 写真に見る明治 29 年大洪水」）、資料23：西武造園株式会社提供

参考文献

『令和7年度内閣府「事前防災対策総合推進費」事業 文化財を防災教育に活かすための視点—災害の記憶を伝える文化財—』（文化庁文化財第二課、令和8年3月）



資料23 近江国覇流村墾田地図の比定地（曽根沼遺跡、大部分は干拓して陸地化）

編集：滋賀県・米原市教育委員会 発行：滋賀県文化財保護課

Tel : 077-528-4674
E-mail : kinenbutsu@pref.shiga.lg.jp

令和8年7月